2026(令和8)年度　獨協中学校＜第1回＞入学試験問題 2026・2・1

〔国　　語〕

○ 実 施 時 間 【8：30～9：20】(50分)

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

(1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。

(2) 問題は 一 ～ 三 、21ページまであります。

(3) 答えはすべて解答用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。

(4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。

(5) 内容に関する質問は受け付けません。

(6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて監督(かんとく)の先生に合図しなさい。

(7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。

(8) 解答上の注意

・字数指定のあるものは、句読点〔。 、〕および「 」や( ) なども一字と数えること。なお、一マスには一字しか入れられません。

・文末表現は、「こと」、「から」など、問いにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受験番号		氏名	

一　次の――のカタカナを漢字に改めなさい。

① 開会式の行進でキシュを務める。
② 詩をアンショウする。
③ 彼はメイロウで人柄が良い。
④ 長い道のりをソウハする。
⑤ 戦国一のブユウを誇る。

二　次の文章Ⅰ・Ⅱを読んで、後の問いに答えなさい。

Ⅰ

日本という国が世界の舞台にデビューして、約一五〇年が過ぎたが、日本人は富国の資源として観光を正視したことはなかった。

明治維新においては、合理性に立脚した西洋の科学技術と産業思想を目の当たりにした[注1]驚愕と焦りがまずあった。したがって自国の文化を[注2]放擲して、徹底的に西洋化に［＊］を切る方針が生まれた。二一世紀という遠い未来の文脈を見据えて、日本固有の文化を資源ととらえる余裕などなく、欧米列強に追いつくべく殖産興業と富国強兵にいそしんだわけである。うかうかしていると、欧米列強に組み敷かれてしまいかねない危機感の中ではこれは仕方がなかった。日清戦争に勝利し、当時の日本の国家予算の三倍もの賠償金を清国から得たことによって、日本は多数の才能を欧米へ留学させ、結果として短期間のうちに近代を身にまとうことができたのである。

しかし、どうにか日本が国としての体裁を保ったように見えた時には、はやる勢いを抑えきれず、軍国主義の[注3]台頭を許し、植民地経営のためにアジア進出を図るという過ちを犯し、結果として日中戦争、そして太平洋戦争へと戦火を拡大し、米国に[注4]蹂躙されて国土は焼け野原になってしまった。

[注5]焦土からの戦後復興は厳しい道のりだったが、懸命に工業立国へと［＊］を切り、資本主義が[注6]隆盛する世界の環境下で日本は活路を見出した。製造という[注7]ハードウエアに、[注8]エレクトロニクスを組み合わせることで、小型で性能の良い製品を大量生産するという工業化モデルが生まれ、それは、生真面目な日本人気質にも合致して、日本は高度成長へと突き進んだ。したがって当時の列島の[注9]運用ヴィジョンは「国土の工場化」であった。石油や鉄鉱石などの原料を輸入し、クルマや船舶、半導体やテレビ、[注10]白物家電を作る産業へと、国を挙げて[注11]シフトしたのである。海辺は港湾施設や石油化学コンビナートで覆われ、都市に人口を集め、都市間は高速鉄道・高速道路、そして航空路線で結ばれた。地方は道路や鉄道が敷かれるのを待ち望み、政治はその希望を叶えるために働いた。①こうして日本列島は「ファクトリー」へと改造されていったのである。

それでは、日本の文化はどこへ行ったのだろうか。

文化というものは、いかなる状況でも、その種火を絶やすまいとしてこれを守る人々によって、持続され命脈[注12]を保つものである。したがって、工業化ヴィジョンを強力に進める環境下においては、表立った動きはなかったけれども、目に見えないところで、地下水脈がそれなりに豊かに水をたたえるように、地道に受け継がれてきた。旅館や料亭など、もてなしの価値に評価があつまる領域において、空間の冴えや季節のしつらい、花や庭、茶の湯や書といった伝統の美や技芸が、ひそやかに受け継がれてきた。日本の美意識や感受性は、目立たないけれども強靱に、これらの営みによって命脈を保ってきたと考えられるし、これらを大切に感じる日本人たちの誇りや尊厳も、決して失われることはなかった。

一方で、産業は、国同士の通商によって活性化するものであるから、国と国、会社と会社の国際的な交流が必要になるが、そういう局面においてはそれぞれの国の「文化」が、もてなしの具として利用される。戦後日本においては、文化をハンドリング[注13]するのは、工業の手であり政治の手であった。したがって、その扱い方は端的に言って無骨で、短絡的で、乱暴であった。

「フジヤマ・ゲイシャ」とは、日本人自身による日本紹介の浅薄さを揶揄[注14]する言葉であり、法被[注15]を着て、提灯をぶら下げ、和太鼓を激しく打ちならすパフォーマンスを繰り広げつつ、寿司や天ぷらを食べさせ、折り紙を披露するとか、緋毛氈[注16]を敷いて赤い和傘をさしかけ、その下で抹茶を供するなど……、いずれも和の伝統に立脚したものであるが、紋切り型[注17]の羅列には感受するべき奥行きがない。富士山はあらためて見直しても立派な日本のシンボルであるし、芸者も素晴らしい民衆文化であり、寿司も日本が誇る食の華[注18]である。しかし「フジヤマ・ゲイシャ・スシ・オリガミ……」と連なると、やや印象が変わってくる。個別文化の典型を連ねて、エキゾチシズム[注19]で異国の人々の目を引こうとするのは、自らの文化のたたき売りのようなものである。これは、たたき売りをする側も承知のことだと思うが、ポスト工業化社会に移行しつつある世界の中では、そろそろ②この愚行のマイナス面に気づかなくてはならない。

日本文化は世界のいずれの文化と比較しても、実に独特であり、その本質は簡単には理解されない。理解にたどり着くには少し時間がかかる。しかし、それでいいのである。初見の「ちょんまげ」で驚かせるのではなく、少し時間が経ったのちにやってくる「分かる衝撃」こそ、より深く強い興味を喚起する引き金なのだ。

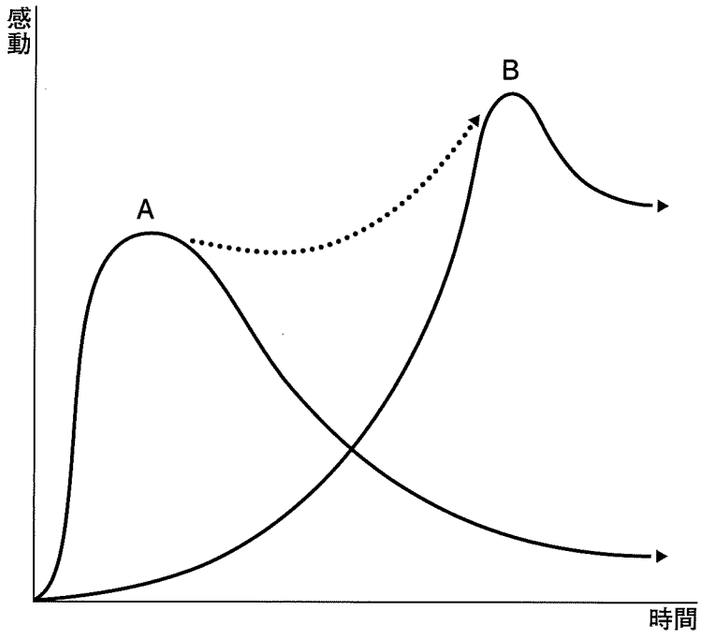
情報過多と言われる今日、人々は何に対しても、「知ってる、知ってる」と言う。英語で言うと「I know! I know!」。ウイルスについても、ヨガについても、ガラパゴス諸島についても……。なぜか「知ってる、知ってる」と二回言う。しかし何をどれだけ知っているのか。情報の断片に触れただけで知っているつもりになっているように見える。だから今日、効果的なコミュニケーションは、情報を与えることではなく、「いかに知らないかを分からせる」ことである。既知の領域から未知の領域へと対象を引き出すこと。これができれば人々の興味は自ずと呼び起こされてくるのである。

政治も経済も、考えられる限りの知恵を絞って、この島国の趨勢[注20]を切り盛りしてきたことには、それなりに納得がいく。しかしながら、そろそろ、僕らは未来の日本を運営するためのリアルな資源を視野に捉えていかなくてはならない。

Ⅱ

便利な暮らしは限られた富裕層のものではない。人々はますます都市に集まり、過疎の集落はますます廃れ、テクノロジーはいびつな形で田舎を蝕む。夥しいプラスチックゴミが孤島の海岸を覆い尽くすように、かつて築かれてきた、暮らしの誇りも、過疎化や民家の退廃[注21]とともに、崩れ去ろうとしている。

一方で、世界は「遊動の時代」を迎えている。その土地に住まう人のみならず、その土地の素晴らしさを味わうために、人々は動



【グラフ】

き始めている。働き方が変わり、幸福のかたちが変わり、[注22]インテリジェンスの向かう先も変わってきた。おそらくは、グローバルな時代にあって、人類がまだ知性を保ち、生きてこの地球の恵みを味わう誇りを失わないなら、興味は、環境の維持と、世界各地にある、その土地ならではの文化的価値へと移っていくはずである。そしてその[注23]萌芽はすでに見え始めている。

ホテルは今日、人の移動を支えるために、ひと夜を安全に過ごし、安眠と体力の回復を支えるのみの存在ではない。むしろ土地に[注24]潜在する自然を咀嚼し、解釈し、建築を通して鮮明かつ印象的に来訪者にそれを表現する装置である。またその土地に産する食の恵みを見事に収穫し、成果として差し出してくれるサービスでもある。

高原の風の心地よさに気づくのも、海辺の静けさを再認識するのも、光というものが土地土地によっていかに違うかを知るのも、ホテルという、考え抜かれた施設と仕組みを通してであることが少なくない。そして③ホテルを通して、風土を表現し、来訪者をもてなすことが、経済を生み出すと同時に、土地に住まう喜びを蘇らせてくれるかもしれない。

人は故郷の山河に特別な思いがある。郷土の料理は他のどこの土地の料理よりも美味しいと感じてしまう。もちろん、母なる故郷への思いは特別であっていい。しかし少し冷静に考え、その土地の魅力を世界の人々に向けて表現しようとするなら、お国自慢や強すぎる郷土愛はむしろ控えたほうがいいかもしれない。

一方、旅する人の心理は、自分に巡ってきた幸運を疑うことなく受け入れようとする。だから身びいきのお国自慢にもつい耳を傾けるし、そういう場所を訪れた偶然を喜び、その土地の食や産物を土産として持ち帰りたくなる。多くの名所や名物はこのようにできてきたのかもしれない。

しかし「観光」の可能性を、未来を担う「産業」として考えた場合、これまでとは異なる解像度のもとで、客観性を踏まえて、その土地を理解・表現していく知のあり方として捉え直していく必要があるのではないか。なぜなら、観光こそ二一世紀最大の産業と考えられるからである。日本という国は、製造業で戦後復興をなし、高度成長を果たして、経済大国へと上り詰めた。しかし物語の第一章はすでに終焉を迎えたようだ。そして自らの伝統文化や風土を資産とする、次の章がすでに始まっている。そんなふうに思うのである。

Ⅰ・Ⅱ ともに原研哉『低空飛行—この国のかたちへ』岩波書店より）

※ 作問の都合上、原文中の【グラフ】に関する説明を省略し、一部改めました。

注1 驚愕……大きな驚き。
注2 放擲……投げ出すこと。
注3 台頭……有力になってくること。
注4 蹂躙……暴力などによって他を侵害すること。
注5 焦土……建物や草木などが焼けて跡形もなくなった土地のこと。
注6 隆盛する……勢いが盛んになること。
注7 ハードウェア……機械設備。
注8 エレクトロニクス……電子を応用した現象や技術。
注9 ヴィジョン……理想像。
注10 白物家電……冷蔵庫、洗濯機、エアコンなど、日常生活で使われる家電製品の総称。
注11 シフト……切り替え。
注12 命脈を保つ……生き延びること。
注13 ハンドリングする……ここでは扱い方を決めること。
注14 揶揄……からかうこと。
注15 法被……日本の伝統衣装の一種。
注16 緋毛氈……赤い織物のこと。

注17　紋切り型……物事のやり方や表現が、決まりきった型にはまっている状態。
注18　エキゾチシズム……異国情緒。
注19　ポスト工業化社会……ここでは工業化社会のあとの社会のこと。
注20　趨勢……なりゆき。
注21　退廃……傷んで崩れること。
注22　インテリジェンス……情報を集め、分析し、判断や意志決定に役立てる能力。
注23　萌芽……芽がもえ出ること。転じて、物事のはじまり、きざし。
注24　咀嚼……ここでは物事の意味をよく考え、理解を深めること。

問1　［＊］に共通して入る言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　風　イ　幕　ウ　舵　エ　身　オ　息

問2　――①について、「ファクトリー」は「工場」という意味ですが、「日本列島」が「ファクトリー」へと改造されるとはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　米国との戦争に敗れた日本が、焼け野原になった都市を復興させるために経済発展を目指し、高性能な機械を輸入して工業を活発化させたということ。

イ　日本は戦後の復興のために、小型で性能の良い製品を大量生産することから、クルマや船舶など大型貨物を生産するように戦略を変え、経済成長をはかったということ。

ウ　交通網を農村部まで拡張することで労働力を都市と地方に均一に分散させ、国土全体において工業製品の生産が可能になる環境を整えたということ。

エ　海辺に港湾施設等が建てられ、各都市は高速交通網で結ばれるなど、戦後の過程で日本の国土が工業製品の大量生産を可能にするように作り替えられていったということ。

問3　――②とありますが、日本人がどうすることを「愚行」だと筆者は述べていますか。ふさわしいものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア　国際的な交流の場において、自国の文化を短絡的に扱っているということ。

イ　自国の工業化に注力し、文化を持続させる表立った動きをしないということ。

ウ　日本文化の中でも民衆文化だけを取り上げ、その魅力を発信すること。

エ　自国の文化の代表例を単純に列挙して、異国の人々の目を引こうとすること。

オ　日本文化の独自性を過小評価し、消極的な姿勢でそれを紹介すること。

問4　Ⅰの文章中の【グラフ】について、次のア～エの生徒たちが意見を述べています。Ⅰの文章や【グラフ】の内容の説明としてふさわしいものには○を、ふさわしくないものには×をつけなさい。

生徒ア――Aは、Bと比べると短い時間のうちに感動の度合いが頂点に達しているね。Aの頂点は初見の驚きの最大値を示していると思うな。

生徒イ――AはBと比べて、より早く大きな感動が与えられた状態を示しているね。Aは、日本の文化への理解の仕方を表していると思うよ。本質を理解するまでにそれほど時間がかからないからね。

生徒ウ――Bは、Aと比べて感動が高まるまでに時間がかかるものの、感動の度合いは大きいよ。Bの頂点は、「分かる衝撃」の最大値を示しているといえるね。

生徒エ――このグラフでは、時間が経過すればするほど感動が大きくなることが表されているね。最新の流行よりも歴史ある文化の方が、そこから得られる感動も大きくなるということだね。

問5　人々に「日本文化」への興味を抱(いだ)かせるためには、どのような方法をとるべきだと筆者は考えていますか。文章Ⅰにおける筆者の考えを、「日本文化」という言葉を必ず用いて六十五字以内で答えなさい。

問6　次の会話文は、Ⅰ・Ⅱの文章を読んだ獨太(どくた)君と協平君のものです。これを読み、後の（1）～（3）の問いに答えなさい。

獨太　文章Ⅰで、筆者は日本の「観光」をaとして見つめ直す可能性について述べているね。

協平　そうだね。未来の日本を運営していくために、「観光」を重要視しているんだよね。

獨太　文章Ⅱでは、――③とあるように、筆者は「観光」と「経済」を結びつけて、ホテルの役割について述べているよ。

協平　――③についてだけれど、「風土を表現し、来訪者をもてなす」とは具体的にどうすることなのかな？

獨太　それは文章Ⅱにあるように、ホテルで迎え入れる側が、bことだと思うよ。

協平　なるほどなあ。そういった手段で、来訪者に新たな気づきを与えることができるんだね。

獨太　文章Ⅱでは、人々の興味はcへと移っていくはずだとも述べている。「観光」は現代人の興味関心に合致した「産業」だと筆者は考えているんだね。

協平　効果的な方法で、日本の資産である伝統文化や風土を環境に活かすためにはどうしたらいいか、考え続けよう。

（1）　会話文中のaにあてはまる言葉を、文章Ⅰの中から五字でぬき出して答えなさい。

（2）　会話文中のbについて、文章Ⅱの言葉を用いて六十字以内で答えなさい。

（3）　会話文中のcにあてはまる言葉を、文章Ⅱの中から二十五字以上三十字以内でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問7　次のア～オのうち、Ⅰまたは Ⅱ の本文の内容にあてはまるものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア　他者への気遣いや伝統的な作法などの日本的な精神性を教授することこそが、本来の「もてなし」だ。

イ　戦争は、領土を焼失させるのみならず、現地の伝統や文化を途絶えさせるため、絶対に起こしてはいけない。

ウ　日本人は、明治維新の際、自国を西洋化することに焦り、日本文化の価値に向き合う余裕がなかった。

エ　グローバルな時代においては、地球環境や社会問題について、人類全体で考えなければならない。

オ　現代に生きる我々は、従来とは異なる解像度のもとで、客観性を踏まえて各地域や文化を再解釈すべきである。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

前野良沢は杉田玄白ら仲間たちと、「ターヘル・アナトミア」という解剖学書をオランダ語から日本語に翻訳した。杉田玄白の案により、まずは「ターヘル・アナトミア」の中の人体図を「解体約図」として先に刊行し、その後に「ターヘル・アナトミア」を「解体新書」として刊行する準備を進めていた。

玄白の家には、「解体約図」の刊行にともなって多くの客が訪れてくるようになった。

「解体約図」は、従来の中国医学を基礎とした人体組織を完全に否定するもので、新しい洋医学の内容を正確につたえるものとして①世評が徐々にたかまっていた。そして、多くの西洋医学に関心をいだく医家たちが、「解体約図」に翻訳代表者としてしるされている玄白のもとにむらがり集ってきたのだ。

そのような多忙の生活をおくりながらも、玄白は、出版を予定している「解体新書」の草稿の整理につとめていた。

かれは、出版についてその形態をどのようにすべきか思案していた。ターヘル・アナトミアの翻訳は、前野良沢の語学力なしには到底果し得ないものだった。と言うよりは、良沢の翻訳環境を玄白らが整えたにすぎないといった方が適切だった。

玄白は、最大の功績者であり翻訳の中心人物であった良沢の存在を、翻訳書である「解体新書」の中でどのような形をもって遇すべきか思いまどった。かれは、同藩の同志である中川淳庵にも相談し、「解体新書」の序文を良沢に執筆してもらうことに定めた。

そして、さっそく良沢の承諾を得ようとして、翌朝寒風のふく道を築地鉄砲洲　中津藩中屋敷にある良沢の家に急いだ。

良沢は、在宅し書見中であった。

玄白は、対坐すると「解体約図」の反響がかなり大きく、奥州一関の建部清庵との文通もつたえた。

「ところで、解体新書の刊行について種々考慮した末、翻訳の盟主である貴殿に序文をしたためていただくのが最良の方法であると考えました。これは、淳庵殿の意見もきき定めたことでござります」

玄白は、おだやかな表情で言った。

良沢は、うなずきながらきいていたが、玄白の言葉がきれると、

「それは、御辞退申し上げたい」

と、即座に言った。思いがけぬ返事に、②玄白は呆気にとられて良沢の顔を凝視した。

玄白は、良沢の意を解しかねた。自分としては、最高の礼をはらったつもりだったが、良沢は、それでも不満なのかと思った。

「それでは、どのようにいたすべきか、御教示下さい」

玄白は、白けた気分でたずねた。

もしかすると良沢は自分の名のみをしるした訳書として刊行する意図をもっているのではないか、と玄白は勘ぐった。たしかに翻訳は良沢の語学力によって推しすすめられたものだが、協力者としての玄白らの苦心を無視されることは堪えがたかった。

良沢は、眼をとざして黙思していたが、玄白の顔に眼をむけると、

「私の氏名は、翻訳書に一字たりとも記載していただきたくないのでござる」

と、きっぱりした口調で言った。

玄白は、唖然とした。自分の憶測がはずれたことを知ったと同時に、良沢がなんらかの理由で機嫌をはなはだしくそこねていることにも気づいた。

「なぜでござります」

玄白は、おそるおそるたずねた。

「実は明和六年に長崎へ遊学の途次、筑紫の太宰府天満宮に参拝いたしましたが、その折社前で一つの祈願をいたしました」

良沢は、枝の枯れ研がれた庭の樹木に眼をむけた。そして、重々しい口調で、

「私は、長崎へオランダ語修得に出かける心がまえとして、神に誓いを立てたのでござる。オランダ語の研鑽を深めることができますようにと祈るとともに、その修得は決して名をあげるためではない。③もしもこの学業を聞達の餌となすところあらば神明これを殛せよと祈願いたしたのでござる。以上のような理由で、私は翻訳書に名をのせていただくことを御辞退いたしたい」

と、言った。二人の間に、沈黙がひろがった。

玄白は、畳に眼を落し、良沢は庭に眼をむけていた。

「それでは、いかようにお頼みしてもかなわぬことでござりますか」

玄白の言葉に、良沢は、

「神明にそむくことはできませぬ故……」

と、庭に眼をむけながら答えた。

玄白は、しばらく口をつぐんでいたが、

「とりあえず今日は辞去させていただきますが、淳庵殿らとも相談の上、いずれお願いにまいるかも知れませぬ」

と言って、頭をさげると腰をあげた。

良沢は、玄白を玄関まで見送りに出た。雪片が風にふかれて落ちはじめていた。その中を玄白は、門の方へ去っていった。

良沢は、自室にもどると顔をしかめた。

太宰府天満宮に祈願したことは事実だが、「みだりに聞達の餌となすところあらば、神明これを殛せよ」と祈ったことはない。それは、玄白の乞いを辞退する口実につかったにすぎないが、売名のために学業をおこなうのではないという気持は自分のかたい信念であることに変りはない。

祈願の内容を口実にしたのは、玄白の感情を傷つけることをおそれたからで、かたくなな良沢としては最大限の配慮であった。

かれは、ターヘル・アナトミアの翻訳書――「解体新書」の刊行に不賛成だった。少くとも時期尚早と信じていた。翻訳は一応成ったが、良沢にとってその内容は決して満足すべきものではなかった。さらに長い歳月をついやして訳を練り、完訳をはたして後に初めて刊行すべきものだと思っていた。

しかし、玄白は、「草葉の蔭」と渾名されても辟易する風はなく、ひたすら出版することのみに心をかたむけていた。訳語の中に

は不明のものも多いのに、玄白は妥協を強いてこじつけに近い訳出をしてかえりみようとしない。学究肌の良沢には、そうした翻訳経過が大いに不服だった。

それに、玄白がしきりに刊行を急ぐ態度にも強い疑問をいだいていた。

玄白は、「解体新書」の刊行が医家の眼をひらかせる大業だというむけて完訳したものを世に問うべきだと良沢は思っていた。

なぜ玄白が、さらに訳を練る必要のある「解体新書」の刊行を急ぐのか。良沢は、その行為が玄白の名誉欲のあらわれとしか思えなかった。

玄白は、「解体新書」の刊行に先立って世に出した「解体約図」を、

「解体新書の報帖として……」

と、言った。開店披露や新商品の売出し宣伝の目的でまく報帖などという商人の使用する用語を、学術的な言葉の比喩としてつかう玄白が、良沢には俗物のように思えてならなかった。

〈玄白殿は、名声を得る手段としてターヘル・アナトミアの翻訳事業に参加した。それ故にこそ刊行を急ぐのだ〉と、良沢は、庭に舞う雪片に眼をむけながら思った。

玄白は、雪の中を家にむかって歩いた。扱いにくい男だ、とかれは何度もつぶやいた。

かれは、良沢が口にした天満宮への祈願を、序文をことわる口実だということに気づいていた。完全主義者である良沢が、「解体新書」の不十分な翻訳に不満をいだいていて、それが自分の氏名の掲載を固辞した原因だということも察していた。

「愚しいことだ」

玄白は、腹立たしげにつぶやいた。

良沢を満足させるような翻訳をはたすには、さらに長い歳月を必要とするだろう。それよりも、たとえ不備な点は少々あっても「解体新書」を一日も早く世に出して、医家たちに利益をあたえるのが自分たちの社会的義務だと思った。

たしかに玄白には、「解体新書」を刊行することによって名声を博したい気持はあった。ターヘル・アナトミアの翻訳事業は、オランダ医書を日本で初めて訳業に成功させた壮挙であり、たちまち玄白らの名は全国に喧伝されるにちがいない。その待望の日が、眼前にせまっているのだ。

そうした喜びにひたっていた玄白にとって、良沢の固辞は冷水を浴びせかけられたような衝撃だった。

（吉村昭『冬の鷹』新潮社より）

注1　草稿……下書き。
注2　遇す……もてなす。
注3　築地鉄砲洲……現在の東京都中央区湊町や明石町の周辺。
注4　中津藩……現在の大分県中津市周辺を領地として持っていた藩。
注5　書見中……書物を読んでいる最中。
注6　対坐する……向かい合ってすわる。
注7　奥州一関……現在の岩手県南部。
注8　途次……途中。
注9　筑紫の大宰府天満宮……学問の神様である菅原道真をまつる福岡県太宰府市の神社。
注10　研鑽……ここでは能力をみがき高めること。
注11　「草葉の蔭」と渾名され……「草葉の蔭」は「お墓の下」という意味で、体調の悪い玄白を仲間たちがこのように呼んでいた。
注12　辟易する……うんざりする。嫌気がさす。
注13　学究肌……学問や研究にひたむきにうちこむ性格。
注14　俗物……ここでは世間的な名声や利益にこだわる人。
注15　壮挙……壮大で意欲的な計画、またはその実現のこと。
注16　喧伝される……世間に広く言いふらされる。

問1　――①「世評」の「世」と異なる意味で用いられている「世」を含む言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　世論　　イ　世間　　ウ　世紀　　エ　俗世　　オ　出世

問2　――②とありますが、玄白が「呆気にとられ」た理由を五十字以内で答えなさい。

問3　――③とありますが、良沢がこのように玄白に伝えたのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。なお、「学業を聞達の餌となすところあらば神明これを殛せよ」とは、「学業を世間で有名になるための手段とするならば、神よ、その罪を責めて私を殺して下さい」という意味です。

ア　実際に祈願した内容とは異なることを玄白に伝えて、玄白の感情を傷つけずに「解体新書」の序文執筆と名前の掲載を断ろうとしたから。

イ　名誉欲のために学業を用いないという神への誓いを言い訳に、玄白に「解体新書」の早期の刊行をやめさせるとともに自身の名前の掲載もやめさせようとしたから。

ウ　実際は訪れていない太宰府天満宮での祈願を口実にして、玄白から頼まれた「解体新書」の序文を書くことを断り、翻訳書へ名前を載せることも辞退しようとしたから。

エ　太宰府天満宮で神に誓った学業の心がまえを理由に、玄白から依頼された序文の執筆と今後の翻訳作業を全て断ろうとしたから。

オ　神を裏切ることの恐ろしさを言い訳に用いることで、玄白に配慮しながら「解体新書」の序文執筆と今後共同で翻訳作業をすることを断ろうとしたから。

問4　［　＊　］に入る四字熟語として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　有為転変
イ　大義名分
ウ　温故知新
エ　一期一会
オ　因果応報

問5　本文全体を通して、良沢と玄白はお互いをどのような人物としてとらえていますか。その説明としてあてはまるものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア　良沢は「解体新書」の序文の執筆をお願いしてきた玄白のことを無礼な人物ととらえ、玄白は「解体新書」の序文執筆を断った良沢を頑固な人物ととらえている。

イ　良沢は名誉欲の強い玄白を医家にふさわしくない人物ととらえ、玄白は「解体新書」の完訳を目指す良沢を医家よりも翻訳家にふさわしい人物ととらえている。

ウ　良沢は「解体約図」を報帖という商人が使用する言葉でたとえた玄白を俗物的な人物ととらえ、玄白は十分な翻訳を第一に考える良沢を完全な状態を目指す人物ととらえている。

エ　良沢は「解体新書」の刊行を急ぐ玄白をせっかちな人物ととらえ、玄白は翻訳に時間をかける良沢をのんきな人物ととらえている。

オ　良沢は「解体新書」刊行を急ぐ玄白のことを名誉欲にとらわれた人物ととらえ、玄白は早期の出版に反対する良沢のことを扱いにくい人物ととらえている。

問6　次の会話文は、本文を読んだ生徒A～Eのものです。次の中から本文の表現や構成の特徴について述べた発言としてあてはまるものを二つ選び、A～Eの記号で答えなさい。

生徒A――本文で気になったのは、「雪片が風にふかれて落ちはじめていた。」や「良沢は、庭に舞う雪片に眼をむけながら思った。」という雪の描写だな。空中を舞っている雪を描くことで、良沢と玄白の「解体新書」への考え方も常に揺れ動いていることが表現されていると思う。

生徒B――面白い指摘だね。僕は「神明にそむくことはできませぬ故……」「……」という表現が気になったよ。「……」という省略形が用いられることで、良沢と玄白には言葉を口に出さなくても理解しあえる信頼関係があるということが表現されていると思ったよ。

生徒C――なるほどね。僕は「これは、淳庵殿の意見もきき定めたことでございます」や「それは、御辞退申し上げたい」という発言に着目したよ。良沢と玄白が会話の中で互いにあえて敬語を使うことで、相手に対するいらだちを言葉に滲ませていると思ったよ。

生徒D――そうなのかな。僕は「良沢は、自室にもどると顔をしかめた。」と「玄白は、雪の中を家にむかって歩いた。」という文から始まる場面に注目したよ。良沢と玄白がそれぞれ一人きりになった場面で、二人の本当の思いが語られる構成になっていると思ったよ。

生徒E――僕は目線の描写に注目したよ。「玄白は呆気にとられて良沢の顔を凝視した。」「良沢は、枝の枯れ研がれた庭の樹木に眼をむけた。」、「玄白は、畳に眼を落し、良沢は庭に眼をむけていた。」というように二人の目線の動きを細かく描くことで、二人の気持ちが効果的に表現されていると考えたよ。

問7　「解体約図」と「解体新書」について、次の【ノート】にまとめました。【ノート】を読み、後の（1）～（3）の問いに答えなさい。

【ノート】

○「解体約図」・「解体新書」の翻訳について

・前野良沢……翻訳の最大の［a］として玄白から認識されている。

・杉田玄白……「解体約図」に翻訳［b］としてしるされている。

○「解体新書」を刊行することに対する良沢と玄白のそれぞれの考え方

・前野良沢……［c］だと考えている。

・杉田玄白……［d］だと考えている。

（1）［　　］a・bにあてはまる言葉を、本文中からそれぞれ三字でぬき出して答えなさい。

（2）［c］にあてはまる言葉を三十五字以上四十字以内でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

（3）［d］にあてはまる言葉を六十字以内で答えなさい。